

# 現象學と唯識論

## —— 他者について ——

玉置 知彦

### 1. はじめに

『成唯識論』にはこんな記述がある。唯識と言ひながら何故他者の存在をみとめるのかと。西洋哲學では、主觀性を突き詰めてこそ初めて他者の問題に行き着くのであり、従つて近代以降に問題となるのであるが、千三百年程前に日本に傳はつた法相宗の唯識論ではすでに問題として擧げられてゐたのである。ただ現象學でのやうに詳細に論じられてゐるのではなく簡潔に述べられてゐるため、一讀して何が言はれてゐるのか良く分らないのである。そこを現象學の觀點から照しだすことによつて意味づけを試みてみたい。

さて、唯識論で「唯識無境」といふ場合は、實は自然的態度から超越論的態度に移行して物事を論じてゐるのであるが<sup>1</sup>、唯識論の解説書などでは自然的態度のまま唯識論を解説するため、ますます唯識論が分からなくなつて仕舞ふと云ふのが筆者の見解である。

### 2. 現象學での他者論

#### 2-1. 現象學の初心者としての開始

本稿では、『デカルト的省察』<sup>2</sup>を用ひて唯識論の他者論を解明する。『デカルト的省察』の他者論に関しては、今まで様々な議論が重ねられて來てゐるが、そこには踏み込まず、まずは初心者の立場でフッサールが他者に關しどのやうに記述してゐるかをたどる。そしてその記述を理解できたなら、唯識論で何げなく簡潔に述べられてゐることが、現象學の記述に沿つたものであるかが分り、また現象學の立場から理解できるものであることを示したい。

そしてその場合の出發點は次の記述である。

超越論的主觀性が可能な意味からなる全体であるとすれば、その外部というのはまさに無意味である。<sup>3</sup>

自然的態度では他者を經驗してゐることは自明であるが、「外部は無意味」であるときとみなす超越論的態度へと移行したとき、では他者はいつたいどう扱はれ得るのかといふことである。無意味なものがどうしたら有意義になるのかといふ問であるかのやうである。ところで、第五省察の最終節で次のやうに書かれてゐる。

現象學の端緒においては、初心者はまず現象學的還元を構成的な研究という普遍的な習慣として原創設する。まさにその態度においては、視野に入ってくる

<sup>1</sup> 拙稿「現象學と唯識論」『フッサール研究』第2號参照。

<sup>2</sup> フッサール著、浜渦辰二譯『デカルト的省察』、岩波書店、2001。

<sup>3</sup> 同上『デカルト的省察』、第四省察、第41節、153頁。

超越論的な我が確かに疑いの余地なく捉えられているが、それは全く未規定の地平を伴っている。しかも、この地平は、世界および私が世界について知っていることのすべてが単なる現象となるはず、ということによってのみ一般的に結びついているに過ぎない。<sup>4</sup>

つまり現象学の初心者には缺けてゐるものがあり、もちろん超越論的な我は疑ひなく捉へられてゐるのだが、地平にかんしては一般的にしか關與せず、志向的な解明が作りだす區分がよく分つてゐない状態で始めるのであると述べられてゐる。従つて『デカルト的省察』で他者論を検討する場合、この地平への言及を第一省察から辿る必要がある。フッサールは現象学の初心者として讀者とともに開始するのであるが、缺けてゐるものはその都度なんらかの形で示されてゐるのではないかと思はれる。

第一省察には次のやうに書かれてゐる。

自己経験においては、我が自分自身にとって根源的に近づくことができるものとなる。しかし、この経験がそのつど提供するものは、本来十全的に経験されるものの核の部分のみである。すなわち、我思うという命題の文法的意味が表現している、生き生きとした自己の現在のみであつて、それを越えると、無規定の一般的で推定的な地平、本来的には経験されないが必然的にともに思念されているものの地平が広がっているだけとなる。<sup>5</sup>

我であると思つてゐるのは意識してゐる我、あるいは顯在的な我であつて、すなはち「核の部分のみ」や「自己の現在のみ」である。そしてその自己は諸對象から成る周圍を既に持つてしまつてゐるのである。しかしそれ以外に「無規定の一般的で推定的な地平」や「本来的には経験されないが必然的にともに思念されているものの地平」が擴がつてゐるのであるが、こゝういふ記述を讀む時にはこれ等に他我認識の契機が含まれてゐるとは初心者の我々は考へないのである。

第二省察には次のやうに書かれてゐる。

その学問の最初で唯一の對象は、哲学する者としての私の超越論的な我であり、また、それのみでありうるかのやうに思われる。確かに、超越論的還元の意味には、それが初めは、我とそのうちに含まれているもの、ただし無規定的な規定可能性の地平を伴つたもの、これらのほかは何も存在するものとしな、ということが含まれている。<sup>6</sup>

ここでは、「私の超越論的な我」は、「それのみでありうるかのやうに思はれる」のであるが實はさうではないのであり、「規定可能性の地平」は忘れてはいけないと云ふことであつて、第一省察よりも更に突つ込んだ表現である。第二省察では、對

<sup>4</sup> 同上『デカルト的省察』、第五省察、第 62 節、266 頁。

<sup>5</sup> 前掲『デカルト的省察』、第一省察、第 9 節、52 頁。

<sup>6</sup> 同上『デカルト的省察』、第二省察、第 13 節、64 頁。

象の志向が充足され、確認される地平構造について説明されるのであるが、ここも地平による他者論の伏線である。また、「我とそのうちに含まれているもの」と簡単に言はれてゐるのは、実は第四省察に出てくる豊かな具體性を有するモノイドであり、「同一の極」および「習慣の基體」を含んでをり、さらに「周圍世界」も含んでゐるのである。ところがここを讀む時には、我々初心者はモノイドの定義をまだ知らないのである。

第三省察では次のやうに述べられてゐる。

どこでも問題になっているのは、經驗そのもののうちに超越論的な体験として含まれている志向性を露呈することであり、粗描された地平をそれを充足する可能な明証へもたらすことによって体系的に解明し、またそのうちで一定の型にしたがって繰り返し生じてくるあらたな地平をも同様に解明すること、しかもそれを志向的な相關関係を絶えず研究することによって行うということである。<sup>7</sup>

あくまでも「志向性の露出」と「志向的な相關関係」の解明が問題なのであり、地平に関しては「粗描された地平をそれを充足する可能な明証へもたらすこと」や「一定の型にしたがって繰り返し生じてくるあらたな地平をも同様に解明すること」といふ觀點からの接近が問題なのだと言はれてゐる。すなわち、地平の充足や、繰り返される地平の型によつて他者を論じることが豫告されてゐるのである。すなはち共現前による他者論である。

第四省察では、決定的に次のやうに述べられてゐる。すなはち、他者論の理解に不可欠の「地平」や「潜在的な志向性」に「盲目」であつては「間違つた存在の解釋」になる、何故なら、それらが「存在の意味」を「規定」するのであるからと。

間違つた存在の解釋はすべて、存在の意味をともに規定している地平に対する盲目、および、それに関わる潜在的な志向性という課題にたいする盲目、こうした素朴な盲目から生じる<sup>8</sup>

これを別の觀點から表現すれば次のやうな言ひ方になり、他者問題は潜在的な志向性なしには解明されないといふことである。

他 我が超越論的な我を基盤としてそのうえに現れて確認されるのは、顯在的および潜在的な志向性においてである<sup>9</sup>

更に第四省察では、次のやうに述べられてゐる。

本質的考察といえどもさしあたり一般的に一つの我を手がかりにすることになる。しかもその我にとってすでに一つの構成された世界がある、という制約のもとに。これもまた一つの必然的な段階であつて、私たちはそこから出発して、

<sup>7</sup> 同上『デカルト的省察』、第三省察、第 29 節、118 頁。

<sup>8</sup> 前掲『デカルト的省察』、第四省察、第 41 節、155 頁。

<sup>9</sup> 同上『デカルト的省察』、第五省察、第 42 節、163 頁。

それに属する発生の法則の形式を開示することによつて初めて、形相的でもつとも普遍的な現象学のための可能性を見て取ることができる。<sup>10</sup>

以上のことから分るのは、意識されている顯在的な志向性に注目するだけでは、他者の解明は出来ないといふことであり、他者問題には志向性の地平や潜在性から接近しなければならないといふこと、更には發生的現象學が必要であると云ふことである。すなはち實現してしまつてゐる世界の解明が必要であると云ふことである。

それ故、第五省察では發生的現象學からの接近もなされるのであるが、それに関しては様々な議論があるところであり、ここでは靜態的現象學すなはち志向性の地平に注目した他者論に焦點をあてることにする。

## 2-2. 地平による他者論

以下に『デカルト的省察』の第一省察から第四省察に互つて予告されていた「地平」による他者論を第五省察から引用する。

共現前<sup>アブレゼンクチオン</sup>は、他者がもつもので、原本的には近づきえないものを与えてくれるが、それは（私固有のものとして与えられた自然の一部である「彼[他者]の」もつ物体が）原本的に現前することと絡みあっている。しかし、この絡み合いのなかで、異なる身体物体とそれを支配している異なる自我とは、統一的な超越する経験という仕方と与えられている。経験はすべて、共現前された地平を充足し確認する経験の進行を目指しており、調和的な経験の進行がもつ潜在的に確認可能な総合を含んでおり、しかも、それを非直觀的な予測という形式において含んでいる。<sup>11</sup>

他者の身體物体は原本的に現前するが、それを支配する他者の自我は原本的には近づき得ず、この他者経験は「共現前された地平を充足し確認する経験」であり、「潜在的に確認可能な総合」であると述べられてゐる。

次の引用では、地平の充足のされ方の一定の型の違ひが、自己の経験と他者の経験の違ひであると言ふことが述べられてゐる。

経験された異なる[他者の]身体が繼續して現実に身体として示されるのは、その変化はしても常に調和する「振る舞い」においてのみであるが、その際、この「振る舞い」は心的なものを共現前によって指示する物的側面を持ち、いまやこの心的なものが原本的な経験において充足されながら現れるはずである、と。しかも、振る舞いが或る局面から別の局面へ絶えず変化するなかで、そのようなことが起る。それゆえ、その身体が振る舞いと一致しない時には、それは仮象の身体[身体に見えただけのもの]として経験されることになる。

「異なるもの[他者]」の存在性格は、原本的には近づきえないものが確認可能な近づきうるものとなる、上のような仕方に基づいている。いつか原本として現前し確認できるものは私自身であるか、固有なものとして私自身に属してい

<sup>10</sup> 同上『デカルト的省察』、第四省察、第 37 節、140-141 頁。

<sup>11</sup> 同上『デカルト的省察』、第五省察、第 52 節、204-205 頁。

る。それに対して、原初的には充足されえない経験、<sup>オリジナル</sup>原本としてそれ自身を与えることはないが、指示されたものを一貫して確認するような経験、このように基づけられた仕方で経験されるもの、それが「異なるもの<sup>アレキヤト</sup>」[他者]なのである。

12

第五省察の最終節では締めくくりとして次のやうに述べられてゐる。すなはち第一節から第四節までに予告、暗示されてゐた地平の考へ方で他者を論じ切つたと言ふことである。

私は私の「うちに」他者を経験し、認識し、他者は私のうちで構成される……しかも、共現前によって反映されるのであって、原本<sup>オリジナル</sup>としてではない。<sup>13</sup>

平たく言ふと、原理的に充足されることのない志向性の一つの型として他者は超越論的主観の中で経験されるのであり、これこそ志向性で他者を論じる現象学の成果であると言へる。他者とは超越論的主観の外部に探し求めるやうなものでは無かつたといふことであり、他者とは原本としては経験できない他なるモナドであると云ふことである。

### 2-3. モナド論

さて、他者を論じる場合は現象学の初心者<sup>の</sup>自我ではなく、第四省察で論じられてゐるモナドを念頭に置かなくてはならないのであるから、モナドに関してここで確認しておく。

私たちは、同一の極としての自我、および習慣の基体としての自我から、豊かな具体性において捉えられた我<sup>エゴ</sup>（これをモナドというライプニッツの言葉で呼ぼうと思う）を区別する。それは、自我がそれなしにはまさに具体的でありえないやうなものを付け加えることによつてである。自我は、その志向的な生のうちで流れる多様なものと、そのうちで思念され、場合によっては存在するものとして構成された対象と、この両方を備えたものとして初めて具体的なものとなることができる。<sup>14</sup>

モナドは「同一の極」や「習慣の基體」、さらには「流れる多様なもの」と「構成された対象」を有する「豊かな具體性」として考へなければならない。そして、このモナドが他者を構成するとは次のやうに説明される。

我としての私に特に固有なもの、すなわち、私の具体的な存在とは、純粹に私自身のうちでかつ私自身にとって、閉じられた固有性をもつた「モナド」であるが、それは、あらゆる志向性を含むと同様に、異なるもの<sup>アレキヤト</sup>に向けられた志向性をも初めから含んでいる。(中略) このように特徴づけられた志向性において、新しい存在の意味が構成されるが、それは、自分に固有なものをもつた私のモ

<sup>12</sup> 前掲『デカルト的省察』、第五省察、第 52 節、205-206 頁。

<sup>13</sup> 同上『デカルト的省察』、第五省察、第 62 節、265 頁。

<sup>14</sup> 同上『デカルト的省察』、第四省察、第 33 節、125 頁。

ナド的な我を超え出るものである。そこでは、一つの我が、自我自身としてではなく、私に固有な自我である私の「モノダ」のうちに姿を映すものとして構成される。しかし、この第二の我は、端的にそこに存在し、本来的にそれ自身が与えられているというのではなく、それは他 我として構成されるのだ。<sup>15</sup>

ここで言はれてゐることは、下記の最終節の簡単な表現で言ひ表はされる。他者論での我は、モノダとしての我を想定しない限り理解不可能であり、モノダが前提にされれば志向性を用ゐて他者を論じる事が出来るといふことである。しかし、現象學を始めたばかりの初心者には、我とはモノダであるとは知られてゐないのであるから、「外部の他者」に氣をとられてしまふのである。

私は私の「うちに」他者を經驗し、認識し、他者は私のうちで構成される……しかも、共現前によって反映されるのであって、原本としてではない。<sup>16</sup>

このやうにモノダとしての他者を世界の中に經驗するとき、共現前によつて我々は他者に「同一の極」や「習慣の基體」、さらには「流れる多様なもの」と「構成された対象」を認めるのである。

第五省察の最終節では、次のやうに述べられてゐる。外部に他者を求めるのではなく、地平で他者を論じることがモノダ論でもあるといふことである。

私にとって存在するものは、すべてその存在の意味をもつばら私自身から、私の意識の場からのみ汲むことができる、というテーゼが根本的な有効性を保持しながらも、独我論という仮象は解消されることになった。この觀念論は、モノダ論であることが判明したのだ。<sup>17</sup>

ここでは、「超越論的主観性の外部というのはまさに無意味である」との初心者の出發點を確認してゐるのである。ただ、モノダ論の他者を十分理解するには初心者を超えて、發生的現象學の領域において、モノダロジーの地盤で相互主観性の生成を解明する必要があることを補足しておきたい。

### 3. 唯識論での他者論

#### 3-1. 他者論

唯識論としては法相宗の經典である『成唯識論』<sup>18</sup>を對象とする。『成唯識論』では、發生的現象學に對應する他者論も記述されてゐるのであるが<sup>19</sup>、『デカルト的省察』の他者論を靜態的現象學の觀點すなは地平による解明として讀んで來た關係上、ここでは靜態的現象學に對應する部分を検討する。

以下に引用する箇所は、唯識無境といふことすなはち外部は無であるとの教義に

<sup>15</sup> 前掲『デカルト的省察』、第四省察、第44節、169頁。

<sup>16</sup> 同上『デカルト的省察』、第五省察、第62節、265頁。

<sup>17</sup> 同上『デカルト的省察』、第五省察、第62節、267-268頁。

<sup>18</sup> 『國譯一切經、瑜伽部七』大東出版社、改訂5刷、1996。

<sup>19</sup> 同上、(52)-(53)頁に發生的現象學に相當する記述がある。

對して、他者は存在するのではないかと問はれ、それに答へるといふ論の進め方になつてゐる。この問ひ掛けは、現象學の初心者の疑問と重なる問ひである。これを讀む場合には、唯識無境とは超越論的還元を行ふことであり、従つて超越論的主觀にとつての他者を論じてゐるのだと見なさなければならぬ。

#### 外に他心を取るを難ず<sup>20</sup> (原文)

外色は實に無なるをもつて、内識の境には非ざる可し。他心は實有なり。寧ぞ自の所縁に非ざるや。誰か、他心は自識の境に非ずと説かん。但彼はこれ親所縁なりと説かざるのみ。謂はく、識の生ずる時には實の作用なし。手等の親しく外物を執り、日等の光をのべて親しく外境を照すが如きには非ず、但だ、鏡等の如く、外境に似て現ざるを他心を了すと名く。親しく能く了するものには非ず。親しく了する所とは、謂く自の所變なり。

#### 外界に他者が存在するとみなすことを論難する (筆者による現代語譯<sup>21</sup>)

[問]外界の物質的なものといふのは無なのであるから、主觀の中に現はれる客觀的なものと云ふものではないとは唯識論の主張である。しかし他者は実際に存在するのではないか。私の対象物でないとは言へないのではないだろうか。[答]他者は主觀の中に現はれる客觀でないなどとは論じてゐない。原本としてそれ自身が與へられる対象であるとは論じないだけである。他者を經驗する時には、私が自ら物をつかんだりするやうに、或いは太陽の光が隈なく外界を照しだすやうには、すなはち私自身のことのやうには經驗できないと云ふことなのである。ただ外的な客觀に似て現はれることを稱して他者の存在を認めたと云つてゐるのであつて、原初的に充足できるのではないのである。原初的に充足することが出来るのは自己の意識の構成に關してである。

解説書などの説明では、他者の心は分らないと云つた説明なのであるが、そのやうなことが述べられるのではない。唯識無境といふのは現象學的還元を行ふことであるから、唯識論で他者を論じるといふことは、人間を論じたり人生訓を引出してゐるのではなく、現象學と同じく「現象」としての人間を論じてゐるのである。唯識論を根本教義とする法相宗の「法相」とは法(存在)<sup>すがた</sup>の相のことで、法相宗とは現象を究める宗派のことなのである。勿論、唯識論では地平やその充足などといふ概念を使つて論じてゐるのではないが、ここでの論の運び方をみると、次の記述と同じである。(先程の引用を再掲)

原初的には充足されえない經驗、<sup>オリジナル</sup>原本としてそれ自身を与えることはないが、指示されたものを一貫して確認するような經驗、このように基づけられた仕方で經驗されるもの、それが「異なるもの<sup>アレキメト</sup>[他者]」なのである。<sup>22</sup>

同じことが述べられてゐる。といふのも唯識無境とは、現象學的還元を行ふこと

<sup>20</sup> 同上、(182)頁。

<sup>21</sup> 譯に當つては Dan Lusthaus, *Buddhist Phenomenology*, RoutledgeCurzon, 2002, pp.490-491 を参照した。この本には『唯識三十頌』の英譯や『成唯識論』の一部の英譯がある。ただし、フッサールの他者論との對照では論じられてゐない。

<sup>22</sup> 前掲『デカルト的省察』第五省察、第 52 節、206 頁。

であり、超越論的態度で論じてみるといふことだからである。そして、現象學では他者を論ずるに當つてはあくまで志向性を手放さないのであるが、唯識論でも志向性の考へ方を共有してゐる<sup>23</sup>のであるから、他者の論じ方も同じになるのだと考へられる。『成唯識論』のこの一節が、現象學から見れば志向性から解明され記述された他者論であると見做すことが出来る。そして、唯識論の他者論を超越論的態度からのものであると見做すことが出来なければ、他者の心は分らないなどと云ふ自然的態度での解釈にとどまらざるを得ないのは、いかんともし難いと云ふことではなからうか。

### 3-2. モナド論

我とは何かがつてゐなければ、實のところ他者を論じることが出来ないのであるが、唯識論でもモナドといふ考へ方が示されてゐる。下記の引用は、他者の存在を認めるのであれば唯識などと言へないではないかとの問いに對して答へる形になつてゐる。問い掛けた者は、唯識論とは獨我論であると見なしてゐる譯である。

既に異境あらば唯にあらずといふ難<sup>24</sup> (原文)

既に異境あり、何ぞ唯識と名くるや。奇なる哉固く執して觸る處に疑を生ずることや。豈唯識の教へなりとも但一りの識のみと説かんや。爾らずば如何ぞ。汝應に諦に聽くべし。若し唯一りの識のみならば、寧ぞ十方の凡聖と尊卑と因果等の別有らんや。誰が誰の爲に説くや。何なる法を何が求めんや。故に唯識といふ言には深き意趣有り。識といふ言は、總じて一切の有情に、各八識と六位の心所と所變の相見と分位の差別と及び彼の空理所顯の眞如と有りといふことを顯はすなり。

他者を認めるのであれば、唯識などと言へないのではないかとの論難 (筆者による現代語譯<sup>25</sup>)

[問]既に他者を認めるのであれば、なぜ唯識など稱するのか。[答]實體的なものの見方に固執してゐるので、そのやうな疑問が起るのである。確に唯識の教へとはいふものの、唯一人の識とは説いてゐないのである。唯一人の識ではないとは、どういふ意味なのか。もし唯一人の識といふのであれば、どうして凡夫と聖者、尊い人と卑しい人、因と果などのやうに異なるものがあるのか。誰が誰の爲に説教をし、どの法を誰が求めるのか。従つて唯識といふのは、深い意味があるのである。識といふ言葉は、すべての人間にそれぞれ八つの識と六位の心所と、主觀客觀の構成と、分位の差別とさらに、空理として顯はされる眞如とが有ることをいふのである。

ここで言はれてゐることはモナドの事であり、唯識論でのモナドの具体的な内容が示されてゐる。すなはち、「八つの識」と「六位の心所」と「主觀客觀の構成」と「分位の差別」と「空理として顯はされる眞如」である。ただ内容自體は大いに異

<sup>23</sup> 拙稿「現象學と唯識論」『フッサール研究』第二號参照。

<sup>24</sup> 前掲『國譯一切經、瑜伽部七』(182)-(183)頁。

<sup>25</sup> 譯に當つては前掲の *Buddhist Phenomenology*, pp.487-488 を参照した。ただし、モナド論であるとの指摘はない。



なつてゐるのであるが、しかし、ここでは人間の世界が扱はれてゐるため、第五省察の次の記述に近い内容と言へる。

人間というのはすでに個々人として共同体の構成員という意味を伴つてゐるので（それが動物の社会と呼ばれるものに転用される）、人間の共同体と人間の意味のうちには、＜相互に互ひにとって存在する＞ということが含まれており、このことはまた、私の<sup>ダーザイン</sup>存在とあらゆる他者の<sup>ダーザイン</sup>存在とを客観化しつつ並置することを伴っている。<sup>26</sup>

唯識論でのモナドの考へ方は、獨我論ではないこととして示されるのであるから、論じ方も『デカルト的省察』を彷彿とさせるものがある。また、モナド論として讀まない限り、讀み過ぎしてしまふ箇所でもある。

#### 4. 終わりに

『デカルト的省察』での他者論は、志向性から迫る事の重要性や困難性を縷々説いた上でその結論に到ると云ふ手續を踏んでゐる。ところで『成唯識論』ではいきなり結論だけが出てくる。しかも簡潔な記述であるため、それだけで理解することはほとんど不可能とも云へる。しかし、ここで明らかに出来たやうに現象學での議論を踏へさえすれば、その記述の意味はたちまち氷解するのである。唯識論にはもともと志向性および現象學的還元の發想があるので、他者を論ずれば現象學と同様な結論に到ると云ふことではないか。又、志向性と密接に繋がつた考へ方がモナド論であるとするなら、現象學と唯識論がともにモナド論を有するのは偶然ではないのではなからうか。

『成唯識論』から引用した箇所は靜態的現象學に相當する。そして、『デカルト的省察』はところどころ發生的現象學が顔を覗かせるとは云へ、ほとんど靜態的現象學の立場から論じられてゐる。そのために共通性が良く見えたといふことではないかと思ふ。ところで、唯識論には阿頼耶識や種子といふ考へ方があり、それこそが唯識論の本領なのであり、しかも發生的現象學に對應する考へ方なのである。唯識論の他者論を發生的現象學から解明すれば、両者の関係もより立體的に捉へることが出来るのではないかと考へる。

---

<sup>26</sup> 前掲『デカルト的省察』第五省察、第 56 節、232 頁。